

ジョン・レノックス映画『潮流に逆らって』解説への補遺

Greatchain

2020/10/27

このビデオの冒頭で、オックスフォードの科学者・数学者で、信仰者である John Lennox の新著が、AI（人工知能）を扱うものであることについて、対話者の Stephen Meyer が説明を求めると、レノックスは、この本は『2084』というタイトルで、ジョージ・オーウエルの『1984』をもじったものだと言っている。これは、いわば敵の武器である AI を奪って、自分自身が用いているということであろう。映画 *Against the Tide* のことを、解説者は、「科学がその権威を利用して、ますますこれを横暴にイデオロギー化し、政治化する徴候に対して、これは**闘**の**声**（battle cry）をあげるものだ」と言っている。もっと激しく言えば、殴り込みをかけるものだと言ってもよい。何にせよこれは痛快なことである。ドーキンズの「神は妄想だ」God Delusion に対して、レノックスは「神こそ真実だ」と、堂々と対決姿勢を示している。

5年以上前、私自身もレノックス同様、挑戦的に「超自然がなければ自然は理解できない」と言ったことがある。http://www.dcsociety.org/2012/info2012/150328_1.pdf レノックスは思想家の C・S・ルイスに影響を受けたというが、私は、詩人の T・S・エリオットの言葉がヒントになった。この言い方を、人はどう解釈するかわからないが、かなり抵抗があると思っている。

Eugenie Scott というダーウィン業界の取締役のような人が、「会社だって社員が規則に違反したらクビにします、教師だって同じです」と言ったことは、前に紹介した。その同じスコット女史が、「この自然界のことを研究するのに、**超自然**をもちだすなんておかしいじゃないありませんか」と言っている。

「超自然」supernatural というと、多くの人は、妖怪変化、幽霊といった怪しい現象のことだと思っている。そういう意味に使うこともあるが、ここでいうのはもっと本質的な意味である。これは文字通り、有形的自然を（次的に）超えることであって、もしそんなものはあり得ないというなら、生きていくこと自体が無意味なものになってしまう。超自然や神秘（神聖なるもの）は「迷信」ではない。人はこれを合理的な概念として、筋の通ったものとして受け入れている。

我々はこの自然界に、ダーウィンの延長として、ただ生きているのではない。自分はなぜ、何のために生きているのかを、問わなければならないように、強いられている。自分の存在の原因は、自分自身であるとは言えない。同様に、自然界の存在の意味は、自然ではないもの、自然を超えたものに訊ねてみなければならない。これが哲学あるいは宗教の根源にある要求である。だから、この対談で両者が呆れているように、スティーヴン・ホーキングの *The Grand Design* の冒頭にある、「哲学は死んだ、それは現代の発達した科学、特に物理学に、ついていけなくなった」という言葉は馬鹿げている——もしこの本が、プロパガンダのための偽書でなければ。

「もし神が存在しなければ、我々はどんなことでも許されるだろう」と、ドストエフスキーは言った。C・S・ルイスは、もし神聖なるものの存在を、科学の名において締め出すならば、我々の文化は崩壊すると言った。この「科学帝国主義」のもたらす危機が、今、米選挙期間中にも、現実になりつつあるとして、レノックスや ID 運動の人々は警告を発し、C・S・ルイスの予言通りになったと言っている。

彼らは、この「宇宙の背後にあるインテリジェントな神の存在」を証拠立てるものとして、3つの現代科学の事実認識を挙げている。その重要な一つが、**驚くべきファイン・チューニング**、すなわち「デザイン以外に、どう考えても説明できないやり方で、宇宙は初めから生命のために、厳密に微調整されている」という事実である。そしてさらに驚くべきことは、「それが意味することから、無神論者は目をそらしている」ということである。

これがどういうことを意味するか、比喩を使って説明しよう。我々に、絶対の愛によって我々を愛する親がいるとしよう。だが不幸なことに、その親は言葉が話せず、また、何かの原因で透明人間となって、姿を現すことができないと仮定としよう。我々は何も知らないうちに親に育てられるが、成人して独立した後でも、家も家財道具も知らないうちに用意され、生活費はかならず毎月、十分に入金され、すべてが何ひとつ不自由なく、死ぬまで自由に、思い通りに生きればよいことになっている——。しかし我々は、それを当たり前のことであり、何も不思議だとも思わず、献身的に働き背後から援助してくれる、親がいることも知らず、感謝することもなく、この透明で口を利かない親の最大の特徴である絶対的な愛など、思いもよらず、逆に、自己本位に生きて一生を終えたとしよう。

これは何の比喩か？ これは神あるいは創造者による、我々の生命と生命環境を**超自然的に可能にしてくれた**、宇宙的ファイン・チューニングのことである。これは観測や計測の事実であって、誰も否定することはできない。にもかかわらず、この驚くべき事実を、屋根の上から大声で叫ぶ人はほとんどなく、むしろこれを無視するか、隠そうとする学者がいる。学者でない一般大衆はほとんど知らないだろう。隠すのはわけがあって、自分が

神に代わって、世界を支配することができると思う、科学信者の傲慢によるものである。これは Geoengineering (気象・自然環境操作) でも基本的に同じであろう。

私はこれについて、かなり前から繰り返し「歎異抄」の言葉を引き、親鸞はこの Fine-Tuning を直観的に知っていたという仮説を立てている。「弥陀の五劫思惟しゆいの願をよくよく按ずれば、ひとえに親鸞一人いちにんがためなりけり」とは——「ビッグバン以来、137 億年 (?) の年月をかけて、この宇宙を創造した創造者が、我々人間のために願をかけた理由を、よくよく考えてみると、なんとそれは、この私一人を救うためであった」、と読むことができる。

私はこれを、ID 運動をしている人々に話したことはない。しかし、彼らが特に若者を対象に行っているセミナーで、もしこの話をすれば、かなりの人々が納得するだろうと思う。一般の聴衆はほとんど、これとは正反対の、不毛な、唯物論的人間観を教え込まれているものと考えられる——「人間は本質的に、被害者として生まれてくる」とか、「人間とは結局、宇宙のゴミにすぎない」とか、「人間の尊厳とは実はフェイクだ」とか。

あるとき、ID のセミナーに出席していた一人の若い女子学生が、突然、泣き出し止まらなかった、というエピソードが紹介されている。その原因が何であったかはわからないが、インテリジェント・デザインの説く内容が、知的・論理的であるだけでなく、閉ざされた人間の心を解放し、宗教的な感受性に触れるものであることは確かである。

<http://www.dcsociety.org/2012/info2012/191218-2.pdf>

——以上